

評価項目	評価単位	評価のまとめ
A 普通教育	1. 教育目標	○「自主協同」の教育目標に基づいて「交響して学ぶ子どもを育てる」を研究テーマに据え、異質性が行き交うシティズンシップ教育に取り組んだ。
	2. 教育課程の編成	○児童の発達段階を踏まえ低学年教育課程、帰国児童学級の教育課程の見直しを行った。
	3. 年間授業日数・時数	○年間授業日数・時数を確保するため、都民の日や願書受け付けの日に授業を行うなど、時間設定を工夫した。 ○夏季節電の為、児童の夏季休暇を延長し、その分、秋に土曜登校日を設けた。
	4. 教育活動とその成果	○学年毎に児童の実態を踏まえて特色ある教育活動を展開した。
	5. 行事	○教職員間の共通理解を深め、見通しを持って計画的に準備や練習を進めた。 ○「交響して学ぶ子」の育成を意識し、子どもたちの創造的な活動や異学年交流の活動を重視した。学年独自の行事の持ち方を積極的に検討した。
	6. 進路指導	○一人一人の子どもに応じた進路指導を、教員と保護者がよく話し合う機会を十分に持っているが、教員と保護者の意見が一致することばかりではないので、一層の努力が必要である。 ○帰国児童教育学級の子どもたちについては、海外生活を生かした広い視野から進路選択ができるように、進路関係の保護者会や個別の面談を持つようにした。 ○小中連絡進学に関しては、中学校での内部進学者の現状について小学校時代からの情報をお互いに出し合い、より望ましい今後のあり方の協議が深まった。
	7. 研究・研修	○「なかま」「創造活動」を含め全ての学習分野で交響して学ぶ子の姿を追求した。 ○教員の対話を深める校内研究会の工夫をした。 ○大学の助言者と連携して、研究を深めた。
	8. 帰国児童教育	○帰国児童教育学級のあり方や教育課程を検討した。 ○帰国児童支援室の時間を大切に、複数の担当者が指導に当たった。
	9. 児童への支援	○配慮を要する児童への理解を学年を超えて共有するために、学期に2回の「児童理解」の会を実施した。今年度はスクールカウンセラーにも意見を聞く機会を持った。 ○週1回の部会にスクールカウンセラーにも同席してもらい、随時児童の情報を交換した。 ○「特別支援校内委員会」を活用し、特に配慮を要する児童についてよく話し合い、具体的な指導方針を明らかにした。
B 学校運営	1. 経営・組織	○大学や附属校園と連絡を密にして学校運営や教育研究を進めることができた。さらに研究面を充実させたい。 ○校務分掌や学年経営については、運営委員会で調整しながら部会や学年会を定期的に開いて効果的に進めることができた。
	2. 出納・経理	○副校長が主幹教諭と総務部長、事務職員とともに経理を担当するが、教員全体の関心も高めていきたい。常勤の事務職員が必要である。 ○運営交付金の減少する中、配当校費と運営基金、教材費等の支出バランスを考えながら、教育効果の生まれる支出に心がけた。
	3. 施設・設備	○全教員による月1回の安全点検や月2回以上の巡視を実施し、児童の生活に支障や危険がないかをチェックした。 ○緊急性のある補修箇所は、大学施設チームと連携して早急に対処した。 ○大規模な震災の発生を想定し、現実的で有効な対策を検討した。
	4. 健康	○健康診断の結果を生かし、児童の健康増進に役立てた。 ○保健室登校児童など授業に参加することが難しい児童には、養護教諭やスクールカウンセラー、担任が連携をとって対処した。 ○特にインフルエンザへの対応として、集団での活動の自粛や手洗い・うがいの指導を徹底した。
	5. 安全	○定期的に月1回避難訓練を実施し、様々な条件下の災害に迅速に対応できるよう指導をした。 ○警察の協力をいただき、不審者対応訓練や防犯教室を実施した。 ○起震車体験訓練や煙体験訓練を実施し、地震や火事の際の対処について指導した。 ○通学班別会を実施し、通学中の安全やマナーについて、定期的に指導した。
	6. 情報	○研究情報を外部に発信できるようHPの内容を更新した。 ○緊急メールシステムはスマートフォンにも対応し活用できている。 ○公開研究会の運営が円滑に行えるよう、Webによる受付を導入した。 ○来年度の児童用コンピューター更新に向けフィルタリングの試験的運用を行った。
	7. 開かれた学校	○教育視察や学校参観、授業参観、研究調査、内地研修を数多く受け入れた。 ○外部教育機関へ講師を派遣したり、研修場所を教育団体に提供したりした。 ○事務室や児童指導部、情報部、PTA役員などと連携し、安全を最優先しながらさまざまな来校者を受け入れた。
	8. 入学検定	○学校説明会を2日にわたり計6回行い、大学附属の研究機関としての本校の使命を説明して、理解を得るように努力した。 ○求める子ども像や入学検定の出題のあり方、制度、当日の教員の役割分担について検討を行った。 ○帰国児童学級の入学検定を年3回実施した。
	9. 1保護者との連携	○保護者会や面談等を通じて学校や学年活動への理解を得ることに努め、教員と保護者の信頼を深め、保護者と連携しながら児童の教育活動を進める努力をした。 ○学校・学年の教育をより豊かなものにするために、保護者にボランティア活動をお願いし指導体制に厚みを持たせて児童の学習活動をより充実することに努めた。 ○保護者にアンケートを実施し、その結果を教育活動に反映できるよう改善に努めた。
9. 2学年活動	○児童理解を深め児童指導に生かすために、学期末には個別の児童についての情報交換を密に行った。また、学年の発達段階に応じた活動の適正化について検討し学年間の調整を図った。	

評価項目	評価単位	評価のまとめ
大学との連携	1. 連携研究	○特別経費による6か年の連携研究の2年度として、大学や各附属校園の先生方と継続して研究を進めた。その研究成果を、研究紀要第4集にまとめた。 ○5附属連携教育研究の部会を定期的に関き、協議を深めた。
	2. 授業交流	○年間10回の公開授業研究会には他大学や他小学校教員、学生の参加が増えた。
	3. 教育実習	○本学学生11名と日本女子大学学生3名を受け入れた。大学の指導教官にも参観等の協力を得ながら、実習生には教職への理解を深める場を提供した。 ○栄養教諭の教育実習は11名を受け入れ、大学とも連携しながら実習のあり方を改善し進めることができた。
	4. 専門委員会等	○各種委員会では、積極的に意見交換と議論を行った。 ○教育研究推進専門委員会には、小学校からは2名の主任研究員が出て、大学と連携を深める5附属連携研究のあり方やその具体的な内容について協議を重ねた。
	5. 大学の講義担当	○小学校教員免許を取得する学生に対して、教科指導を中心に教材研究や教育論・指導法について現場の立場から講義を担当し教職科目教育に寄与した。
	6. インターンシップ	○発達臨床の学部学生を1名受け入れ、保健室における子どもの対応等を通して、児童理解を深める場を提供することができた。 ○教育学科の3、4年生10名を受け入れ特別支援関係の学習支援と観察や一般学級における実習を伴う学習を見てもらった。学生にはふり返りを書いてもらい、簡単なコメントを返した。
社会貢献	1. 授業参観・研修生受け入れ	○月ごとの授業研究会には、5～20名の外部の参加があった。広報の効果があがった。
	2. 公開研究会開催	○第74回教育実際指導研究会では、協議会を開き2100名の参加者との活発な交流ができた。
	3. 初任者研修・現職研修	○現職研修（お茶大ラウンドテーブル）は異業種の方々との対話ができ参加型として有意義であった。
	4. 途上国教育支援	○アフガニスタンや中西部アフリカ等の途上国の教育関係者からの視察や参観を受け入れ、授業参観や児童との交流などを行った。
	5. 出版活動	○「公開研究会要項」に新しい研究の成果をまとめた。 ○「児童教育」第22号、研究紀要第19集を作成した。
	6. 各種研究会への協力・支援	○校務に支障がない限り、他校および各種学会などの講師依頼に積極的に応じた。 ○公開研究会以外の参観者を随時受け入れ教育活動の普及・充実に努めた。 ○大学や院生の研究協力を積極的に受け入れ、論文作成に貢献した。

平成23年度学校評価(自己評価) 重点目標とそのまとめ

◎ 重点目標と成果

- 授業研究案内や公開研の事前受付をHPからで行うなど、情報発信デジタル環境の整備が進んだ。
- スクールカウンセラーとの連携や「児童理解の会」などを通して、特別な配慮を必要とする子への指導支援方針の共通理解が深まった。
- 児童の安全・安心を最優先に考え、学校生活に支障がある箇所は早期に発見し、迅速に修理・補填を行い、防災用品の充実を図った。
- 帰国児童教育学級のカリキュラム検討及び入学検定の見直し、帰国児童支援室の学習指導の効果的な実施を行うことができた。
- 給食運営の円滑化や食育の充実を進めるとともに、栄養教諭の教育実習生を積極的に受け入れその養成に努めた。
- 出納・経理面の収支を透明化するとともに、児童の教育活動に資する物品等の購入を最優先する予算配分を工夫した。

◎ 改善点や課題

<教育課程>

- シティズンシップの教育や幼小接続期の教育など、現代的な新しい課題に即した教育課程の研究をさらに推進する。

<学校運営>

- 本校における特別な支援を必要とする児童への教育のあり方をさまざまな観点から検討する。特別に配慮の必要な児童や家庭が増えてくる実態から、学習支援員の配置や教員の心身の健康を守ることも含めて支援をお願いしたい。
- 児童が安心して快適に学校生活を送るために、老朽化により改修を必要とする箇所があるので、校舎内外の施設設備の改善・整備をさらに進める。
- 入学検定のあり方、内容や方法について見直し改善していく。
- 管理すべき諸費用の出納・経理面をわかりやすく整理した。より円滑に処理するために、常勤の事務職員を配置してほしい。

<大学との連携>

- 特別経費による研究等を大学や附属校園と連携してさらに推進する。

<社会貢献>

- 国内外の教育関係者に対して、授業研究、施設見学、給食参観等で253名を受け入れた。
- 2月の公開研究会には招待者も含め2100名の参加者があり、研究成果を発表し協議した。